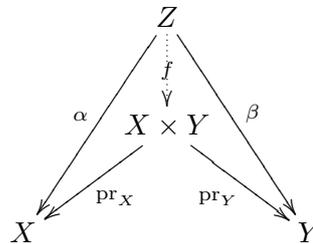


- 前回主に扱ったこと：商環と環準同型写像.
- 商環の普遍性を確認し，環準同型定理を導く（それぞれ集合版にも触れる）.
- イデアルが互いに素であることを定義し，中国剰余定理を導く.
- 応用として「2 で割った余りと 3 で割った余りから 6 で割った余りが分かる」といった常識的事実（105 減算）や，大きな整数正方行列の行列式の計算方法（モジュラー算法）を見る.

普遍性の例：集合 X と Y について，直積集合 $X \times Y$ は次の性質を持つ（ここで $\text{pr}_X : X \times Y \rightarrow X, (x, y) \mapsto x$ と $\text{pr}_Y : X \times Y \rightarrow Y, (x, y) \mapsto y$ は射影である）：

「任意の集合 Z と任意の写像 $\alpha : Z \rightarrow X, \beta : Z \rightarrow Y$ について， $\alpha = \text{pr}_X \circ f, \beta = \text{pr}_Y \circ f$ となるただ 1 つの写像 $f : Z \rightarrow X \times Y$ が存在する」



証明： $f : Z \rightarrow X \times Y, z \mapsto (\alpha(z), \beta(z))$ がそのような写像であることが確認できる.

定義：可換環 $(R, +_R, \times_R, 0_R, 1_R)$ と $(S, +_S, \times_S, 0_S, 1_S)$ について，直積集合 $R \times S$ は可換環の構造 $(R \times S, +_{R \times S}, \times_{R \times S}, (0_R, 0_S), (1_R, 1_S))$ を持つことが確認できる. これを R と S の直積環と言って，単に $R \times S$ と書く. ここで，環演算は成分ごとに以下のように定義している.

$$\begin{aligned}
 +_{R \times S} : (R \times S) \times (R \times S) &\rightarrow (R \times S), & ((r, s), (r', s')) &\mapsto (r +_R r', s +_S s'), \\
 \times_{R \times S} : (R \times S) \times (R \times S) &\rightarrow (R \times S), & ((r, s), (r', s')) &\mapsto (r \times_R r', s \times_S s').
 \end{aligned}$$

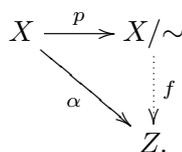
注意：集合 X, Y の直積 $X \times Y$ の普遍性に現れる「集合」と「写像」を「可換環」と「環準同型写像」に変えると，直積環 $R \times S$ の (**CRing** における) 普遍性になっている.

命題 (商集合の普遍性)：集合 X とその上の同値関係 \sim による商集合 X/\sim は次の性質を持つ（ここで $p : X \rightarrow X/\sim, x \mapsto C_x := \{y \in X \mid y \sim x\}$ は自然な全射）：

「任意の集合 Z と任意の写像 $\alpha : X \rightarrow Z$ について，

$$\forall x_1 \in X, \forall x_2 \in X, x_1 \sim x_2 \Rightarrow \alpha(x_1) = \alpha(x_2)$$

ならば， $\alpha = f \circ p$ となるただ 1 つの写像 $f : X/\sim \rightarrow Z$ が存在する」



証明： $\alpha = f \circ p$ とすると， $\forall x \in X, \alpha(x) = f(C_x)$ でなければならないので， f は存在するとただ1つ．よって $f(C_x) = \alpha(x)$ によって $f: X/\sim \rightarrow Z$ が well-defined であることを言えばよい．つまり $\forall x \in X, \forall x' \in X, C_x = C_{x'} \Rightarrow \alpha(x) = \alpha(x')$ を言う．定義によって $C_x = C_{x'} \Leftrightarrow x \sim x'$ ．

系（集合での準同型定理）：集合 A, B と写像 $h: A \rightarrow B$ について， A 上の同値関係 \sim_h を

$$a_1 \sim_h a_2 \Leftrightarrow h(a_1) = h(a_2)$$

と定めると，単射 $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow B$ は全単射 $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow \text{Im } h$ を誘導する．

証明： $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow B$ は単射である（実際 $a, b \in A$ について， $\bar{h}(C_a) = \bar{h}(C_b)$ は $h(a) = h(b)$ と同値で，定義よりこれは $a \sim_h b (\Leftrightarrow C_a = C_b)$ と同値）．よって $\bar{h}: A/\sim_h \rightarrow \text{Im } h$ は全単射である．

命題（商環の普遍性）：可換環 R とそのイデアル I による商環 R/I は以下の普遍性を持つ：

「任意の可換環 Z と任意の環準同型写像 $\alpha: R \rightarrow Z$ について，

$$\forall r \in R, \forall r' \in R, r \equiv r' \pmod{I} \Rightarrow \alpha(r) = \alpha(r')$$

ならば， $\alpha = \bar{\alpha} \circ \pi$ となるただ1つの環準同型写像 $\bar{\alpha}: R/I \rightarrow Z$ が存在する」

$$\begin{array}{ccc} R & \xrightarrow{\pi} & R/I \\ & \searrow \alpha & \vdots \bar{\alpha} \\ & & Z \end{array}$$

証明：（集合論的）写像 $\bar{\alpha}: R/I \rightarrow Z$ で $\alpha = \bar{\alpha} \circ \pi$ となるものがただ1つ存在するので（すぐ前にやった）， $\bar{\alpha}$ が環準同型であることを言えばよいが， $\forall x \in R, \bar{\alpha}([x]) = \alpha(x)$ から容易に確認できる．

定義：可換環 $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$ の部分集合 $S \subseteq R$ が以下の条件を満たすとき， $(S, +|_{S \times S}, \cdot|_{S \times S}, 0_R, 1_R)$ は可換環になる．このとき S を R の部分環と言う．

- (1) $1_R \in S$.
- (2) $\forall s \in S, \forall t \in S, s \pm t \in S, st \in S$.

例： $\mathbb{Z} \subseteq \mathbb{Q}$ は \mathbb{Q} の部分環．一方 $2\mathbb{Z} \subseteq \mathbb{Z}$ は，(1) が成り立たないため，この講義では \mathbb{Z} の部分環ではない（ \mathbb{Z} のイデアルにはなっている）．

命題：可換環の環準同型写像 $f: R \rightarrow R'$ について

- (1) $\text{Im } f$ は R' の部分環．
- (2) $f^{-1}(0_{R'}) (= \{x \in R \mid f(x) = 0_{R'}\})$ は R のイデアル．

証明：容易．

記法: $f^{-1}(0_{R'})$ を f の核と呼び, $\text{Ker } f$ と書く.

定理 (環準同型定理): 可換環の環準同型写像 $f: R \rightarrow R'$ について, 単射環準同型写像 $\bar{f}: R/\text{Ker } f \rightarrow R'$ は, (すぐ下の命題によって) 環同型 $\bar{f}: R/\text{Ker } f \xrightarrow{\sim} \text{Im } f$ を誘導する.

証明: $x, x' \in R$ について, 以下を確認すればよい: $x \sim_f x' \Leftrightarrow x \equiv x' \pmod{\text{Ker } f}$.

(\Rightarrow): $f(x) = f(x')$ ならば $f(x - x') = 0_{R'}$. よって $x - x' \in \text{Ker } f$.

(\Leftarrow): 上を逆にたどればよい.

命題: 可換環の環準同型写像 $f: R \rightarrow S$ について, 以下の2条件は同値である.

(A) f は環同型写像

(B) f は (集合論的) 全単射

証明: (A) \Rightarrow (B) は明らか. (A) \Leftarrow (B) を言うには, f の (集合論的) 逆写像 $g: S \rightarrow R$ が環準同型であることを示せる. 例えば $\forall a \in S, \forall b \in S, g(a+b) = g(a) + g(b)$ を示そう.

今, f は全単射なので $\exists! A \in R, a = f(A)$ かつ $\exists! B \in R, b = f(B)$. f は準同型なので $f(A) + f(B) = f(A+B)$ なので, $g(f(A) + f(B)) = g(f(A+B)) = A+B$. よって, 左辺 $= A+B$. 一方, $g(a) + g(b) = g(f(A)) + g(f(B)) = A+B$ なので, 右辺 $= A+B$ でもある.

系 (中国剰余定理の簡易版): 可換環 R とそのイデアル I, J について, 環準同型

$$f: R \rightarrow (R/I) \times (R/J), \quad r \mapsto ([r]_I, [r]_J)$$

は, 単射環準同型 $\bar{f}: R/(I \cap J) \rightarrow (R/I) \times (R/J)$ を誘導する.

証明: $\text{Ker } f = I \cap J$ を示せばよいが, f の定義より明らか.

例: $R = \mathbb{Z}, I = 2\mathbb{Z}, J = 3\mathbb{Z}$ とすると, $I \cap J = 6\mathbb{Z}$ で,

$$\mathbb{Z}/6\mathbb{Z} \rightarrow (\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/3\mathbb{Z}), \quad [r]_{6\mathbb{Z}} \mapsto ([r]_{2\mathbb{Z}}, [r]_{3\mathbb{Z}})$$

が単射環準同型と言っている. この例では, もちろん環同型でもある.

イデアルの演算: R を可換環, I, J をそのイデアルとする. 以下は R のイデアルである (容易).

(1) $I + J := \{i + j \mid i \in I, j \in J\}$ (和. 有限個のイデアルの和も同様).

(2) $I \cap J$ (共通部分).

(3) $IJ := \bigcup_{n \geq 0} \left\{ \sum_{k=1}^n i_k j_k \mid i_k \in I, j_k \in J \right\}$ (積. 有限個のイデアルの積も同様).

(4) $(I : J) := \{r \in R \mid \forall j \in J, rj \in I\}$ (商).

(5) $\sqrt{I} := \{r \in R \mid \exists n \geq 0, r^n \in I\}$ (根基).

例: $R = \mathbb{Z}$ で, $a, b \geq 1$ について $I = (a) (= a\mathbb{Z}), J = (b)$ のとき

$$(a) + (b) = (\text{gcd}(a, b)), \quad (a) \cap (b) = (\text{lcm}(a, b)), \quad (a)(b) = (ab).$$

定義：可換環 R のイデアル I, J が互いに素とは $I + J = R$.

注意： $I + J = R$ は以下と同値： $\exists i \in I, \exists j \in J, i + j = 1_R$.

定理：可換環 R の互いに素なイデアル I, J について

- (1) $IJ = I \cap J$.
- (2) $R/IJ \rightarrow (R/I) \times (R/J), [r]_{IJ} \mapsto ([r]_I, [r]_J)$ は環同型写像.

証明：(1) $IJ \subseteq I \cap J$ は明らかなので、 $IJ \supseteq I \cap J$ を示す：仮定より $\exists i_0 \in I, \exists j_0 \in J, i_0 + j_0 = 1_R$.
よって $x \in I \cap J$ について、 $x = xi_0 + xj_0 \in IJ$.

(2) (1) と中国剰余定理の簡易版より、写像の全射性を言えばよい： $([a]_I, [b]_I) \in (R/I) \times (R/J)$ について、 $y = bi_0 + aj_0$ とすると、 $[y]_I = [a]_I, [y]_J = [b]_J$ である.

定理（中国剰余定理，CRT）：可換環 R のイデアル I_1, \dots, I_n が、任意の $1 \leq i \neq j \leq n$ について $I_i + I_j = R$ ならば、

- (1) $I_1 \cdots I_n = I_1 \cap \cdots \cap I_n$.
- (2) $R/I_1 \cdots I_n \rightarrow (R/I_1) \times \cdots \times (R/I_n), [r]_{I_1 \cdots I_n} \mapsto ([r]_{I_1}, \dots, [r]_{I_n})$ は環同型写像.

証明： n についての帰納法 ($n = 1$ は明らかで、 $n = 2$ はすぐ前でやった).

- (1) $i = 1, \dots, n - 1$ について $x_i \in I_i, y_i \in I_n$ を $x_1 + y_1 = 1_R, \dots, x_{n-1} + y_{n-1} = 1_R$ と取る.

$$1_R - x_1 \cdots x_{n-1} = (x_1 + y_1) \cdots (x_{n-1} + y_{n-1}) - x_1 \cdots x_{n-1} \in I_n$$

なので、 $J := I_1 \cdots I_{n-1} (= I_1 \cap \cdots \cap I_{n-1})$ とすると、 $J + I_n = R$. よって $J I_n = J \cap I_n$.

- (2) $R/J I_{n-1} \xrightarrow{\sim} (R/J) \times (R/I_n)$ から従う.

例（105 減算）： $R = \mathbb{Z}, I_1 = 3\mathbb{Z}, I_2 = 5\mathbb{Z}, I_3 = 7\mathbb{Z}$ とすると

$$\mathbb{Z}/105\mathbb{Z} \xrightarrow{\sim} (\mathbb{Z}/3\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/5\mathbb{Z}) \times (\mathbb{Z}/7\mathbb{Z}), [r]_{105\mathbb{Z}} \mapsto ([r]_{3\mathbb{Z}}, [r]_{5\mathbb{Z}}, [r]_{7\mathbb{Z}}).$$

これは整数 n の 3, 5, 7 の余りを知ることと、 n の 105 の余りを知ることが同値であると言っている.

注意： $R = \mathbb{Z}[x], I = (2), J = (x)$ とすると、 $I + J = (2, x) \subsetneq \mathbb{Z}[x]$ なので（つまり $f(x), g(x) \in \mathbb{Z}[x]$ をうまく選んで $1 = 2f(x) + xg(x)$ とは出来ない）、 I と J は $\mathbb{Z}[x]$ のイデアルとしては互いに素ではない（「 $\mathbb{Q}[x]$ のイデアルとしては」互いに素である）.

注意： $A = (a_{ij})_{1 \leq i, j \leq n} \in M_n(\mathbb{Z})$ について

$$|\det A| \leq \prod_{j=1}^n \sqrt{a_{1j}^2 + \cdots + a_{nj}^2}$$

なので、十分たくさんの素数 p について、 $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$ で $\det A$ を計算すると、CRT から $\det A \in \mathbb{Z}$ を復元できる。 $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$ は体なので（次回示す）、ガウス消去法を行列式の計算に用いることができる.